



どんと燃えろ 左義長
「今津北小学校」で

●特集 ②-⑤ 情報を、あの手この手で あなたのもとへ

- 6・7 お知らせ拡大版
- 8 みんなで5・7・5
- 9 こころの絆
- 10 教育委員会 information
- 11 健康生活
- 12・13 まちなタ写真館
- 14・15 国保年金あらかると
- 15 省エネ長者
- 16 びょういんだより
- 17-21 情報おしらせ版
- 22 そうだ図書館に行こう♪
- 23 窓口・納税
- 24 歴史散歩

広報たかしま
平成21年2月1日(土)

第84号

発行／高島市 編集／企画部秘書広報課
〒500-0001 滋賀県高島市新旭町北畑ののり番地 ☎0740(25)8030

http://www.city.takashima.shiga.jp
t:info@city.takashima.shiga.jp

高島市
歴史散歩

No.50

江戸時代に全国ブランド「高島硯」

安曇川と鴨川にはさまれた阿弥陀山から産出する粘板岩は、近年の発掘調査等の成果により、平安時代の終わり頃から現代まで「高島硯」の原石として使われてきたことがわかってきました。

江戸時代の記録である『硯材史』には「高島石には、玄性と虎斑の2種類があって、きめが滑らかである」ことが記されています。硯石をよく観察すると、灰黄緑色のやや軟らかめの粘板岩で黒い柳葉状の斑がみられるものと灰青黒色の硬い粘板岩で虎斑紋と呼ばれる黄色い斑がみられるものの2種類があり、前者を玄性石、後者を虎斑石と呼んでいたことがわかります。



▶ 硯作りの様子（大正初期）

また江戸時代の高島硯の裏面には、硯を机面に安定させるためにほどこされた覆手と呼ばれる浅い内彫りがみられます。この中には所有者名や年号などのほかに「高嶋石」「本高嶋上石」「極上本高嶋石」「高嶋青石」「本高嶋虎斑石」「高嶋虎斑石」など「高島」の銘をもつ様々な刻字がみられます。

虎斑石はその中での特選品を指すわけですが、班の字は斑の誤りで、生産地で誤った字を刻むわけがありませんので持ち主が自分で刻んだと考えられます。これらの硯は江戸や京都を中心に、北は北海道の松前藩陣屋跡、南は兵庫県池田藩姫路城下の武家屋敷跡などから出土しています。大溝藩の領

主分部家の文書には、近郷の商工業者に硯石の採掘をまかせて雑税を納めさせていたことや、「掘出す石は皆本藩のものなり」などと記されており、江戸時代には大溝藩の専売品として、朽木藩の「朽木盆※」と同様、全国ブランドとして流通し、「高嶋」と刻むことでより高級感を演出することが流行していたと考えられます。

（文化財課）



▶ 江戸時代の高島硯の裏面

※高島市歴史散歩No.48
2008年12月1号で紹介



高島の若者よ、未来を拓け！
（高島市成人式で）

編集後記

▼小正月の1月15日、今津北小学校で児童や隣接する保育園児らが参加して、新年の恒例行事「左義長」が行われました。今津北小学校の左義長は半世紀以上も続く伝統行事で、雪が降りしきる中、児童らは燃え上がる炎に、今年1年の安全と、書道や絵の上達を願いました。▼1月15日といえば元「成人の日」。今年は、平成生まれが初めて成人式を迎えました。1月11日、高島市では675人の「平成成人」が誕生し、旧友たちと親交を深め、これまでの歩みを振り返りつつ、大人としての一歩を踏み出しました。「裏方で一生懸命に自分たちを支えてくれている人たちがいてくれるからこそ、表舞台上に立ち上がることを忘れてはいけない」と、一部の若者にそんな思いを抱いたものの、不況の荒波を吹き飛ばしそうな華やかな新成人たちの表情に、力強さと未知なる可能性を感じました。
（広報担当）